

---

# スーパーロボット大戦 the ZEXIS

踊るアゴ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

スーパーロボット大戦            the ZEXIS

### 【Nコード】

N0585V

### 【作者名】

踊るアゴ

### 【あらすじ】

次元の壁が壊れ、数多の世界が一つとなると、幾つかの秩序と法が生まれた。だが争いが消える事はなかった。これは一つの世界の変革と、それにより数奇な運命と残酷な試練に巻き込まれた者達の物語である。

## 「プロローグ」(前書き)

この作品は、「第2次スーパーロボット大戦Z 破界編」の話や設定などを一部いじくっております。なのでそういうのが苦手な人はご注意ください。

## 「プロローグ」

ある世界で一つの次元震が起きた。

それにより数多の並行世界の壁は壊れ、一つの世界となった。「次元震動」と呼ばれし大災害が起きてから20年の間、幾つかの国家が生まれた。

だが20年たった今でも、人々の世界から争いが消える事はなかった。これはそんな歪み<sup>ねじ</sup>かれた世界で苦悩や葛藤に悩みながらも、明日への希望のために抗い戦い続ける者達の物語である…

「???」…この世界でも人々は争い、憎しみや悲劇が繰り返されているか…ならば私がやるべき事はただ1つ、この世界もまた“箱”の管理をせねばならぬだろう…人類よ、いま一つの結末を知るときが来たのだ!!! フハハハハハハ!!!」

## 「プロローグ」(後書き)

初めまして、小説はほぼ初心者といっても過言ではありません。さらには世界観とか設定がもしかしたら滅茶苦茶になる可能性もあるかもしれませんが、もしそれでもいいという人はゆるくお付き合いください。

## 「100万Gの男」（前書き）

多元世界となった一つの世界。その世界は大胆に言えば3つの国に分けられている。一つは世界の1/3を領土としている「ブリタニア・ユニオン」、中国大陆とロシアを中心とした「人革連」、スペインやフランスなどの中東の集合国際連合国家「AEU」である。その3つの国による冷戦状態が続いていた。今回はその中の一つ、ブリタニア・ユニオンでの話である。

## 「100万Gの男」

「ワシントン」

クロウ「金がない… 本当じゃない…」

とそう嘆くこの長身の青年、名はクロウ・ブルーストという。

なぜこの男がこんなに悩んでいるかというと…

ゼニトリ「おい、とつとと約束の100万G、早く払え！」

クロウの横で怒鳴り散らす坊主頭の中年は、借金取りのゼニトリである。

クロウ「待て待て、すぐ仕事を見つけてちゃんと返すから。」

ゼニトリ「ふざけんな！！こちとら待ちほうけている暇はないんだ！！今すぐ払えねえならこつちも強硬手段をとるぞ！！」

クロウ「おつと、俺は暴力には屈しない主義なんぞね。」

ゼニトリ「キザな事を言っている暇があつたらさつさと金払え！」  
そう、彼は借金を返せず困っていたのだ。しかも100万Gと言えばこの世界では家一軒買える値段である。

だが二人がもめていた時、巨大な地響きが起きた。

ゼニトリ「うわっ！ なっなんだ？」

クロウ「地震じゃねえな… おそらくどつかで誰かがドンパチやってんだろうな。」

ゼニトリ「マ、マジかよ！！冗談じゃない！巻き込まれる前にトンスラだ！」

クロウ「……………」

ゼニトリ「おっおい、何やってんだよ？早く逃げねえと…」

クロウ「悪いな、俺は野暮用が出来た。」

ゼニトリ「おい！そっちは……」

なんと、クロウは騒動が起きている方に行ってしまったのです。

「アクシズ・ラボ 本社」

そこでは、クロウの予測通り、とあるラボが襲撃にあっていた。  
社員「チーフ！早く逃げましょう！」

トライア「冗談じゃないよ。この子を置いて行けないね。」

社員「し、しかし…」

トライア「せめてこの子を動かせたらね…」

クロウ「だったら俺が動かしてやるよ。」

社員「なっ！誰だね君は！？」

トライア「ふーん、あんただったら動かせるのかい？こいつを。」

クロウ「俺はできない事は言わない主義でね。」

トライア「OK。あんたの名前は？」

クロウ「俺はクロウ、クロウ・ブルーストだ。」

トライア「あたしはトリア・スコートさ。」

クロウ「さて、早速行くか、えーっと…」

トライア「試作機ナンバー0（ゼロ）だよ。」

クロウ「なんかその名前はちよつとなー。」

トライア「じゃああなたが決めてやりなよ。」

クロウ「そうだな。じゃあ行くか、“ブラスタ”」

そして、一人の男の戦いが始まる…。



## 「100万Gの男」(後書き)

一様主人公は「破界編」の主人公、クロウです。とりあえずは此処までです。次回から戦闘に入ります。(修正)土地の場所を間違えてしまいました。ご迷惑をかけて申し訳ございません。

「W・L・F・」世界解放戦線」（前書き）

トラブルに巻き込まれた借金男クロウ・ブルーストは、襲撃されているアクション財団のラボに向かう。そこでクロウはトライアが制作していた期待「ブラスタ」に乗り込み、戦場へと向かって行った  
：

「W・L・F・　　世界解放戦線」

　　スコート・ラボ周辺」

WLF「我々は世界解放戦線、WLFである！神聖なる志の元、戦争に補助するアクション財団を破壊する！無論、歯向かう者には容赦はせん！！」

そう叫び、アクション財団に攻撃を仕掛けているのは、ここ最近勢力や勢いが増している一段である。

彼らは戦争に手助けをする存在を徹底的に排除する、いわゆる過激なテロ組織なのである。

クロウ「そこまでしな！」

WLF「なんだ！」

彼らの眼に映ったのは、アクションで作られていた機体、ブラスタとそれに乗ったクロウである。

クロウ「お前らなあ、額に汗して働く事を覚えな。」

WLF「アクションの新型か！たった一機に何ができる！」

クロウ「10機か！あれはアクション財団で作られた量産型起動兵器“アクシオ”だな。」

敵は量産型の兵器、アクシオが10機である。

クロウ「だが、俺の敵じゃないな。悪いなブラスタ、俺の操縦は半端ねえぞ。」

そう言った刹那、ブラスタが装備していた0・ダンガンから放たれた銃撃によって敵の機体は1機を残して殆ど撃墜されたのである。

WLF「ば、馬鹿な！！我らの精鋭部隊が……！！」

クロウ「さあ、これで最後だ！」

そう言うと、クロウはブラスタの盾を飛ばし、最後に残っていた敵の機体を真っ二つに切り倒し、戦いはブラスタの圧勝であった。

クロウが出陣してわずか3分で片が付いてしまったのである。

クロウ「ふう、これで終了……」

だがその時、異変が起きた。

クロウ「なんだ、このエネルギー反応は？」

トライア「クロウ！その場を離れるんだよ！！！」

クロウ「どうした？」

トライア「その周辺で次元震が発生する！！！」

クロウ「何だって！！！」

次元震：それは次元の狭間で起きる一種の災害である。次元震の大きさはその場に時空の歪みとなる“次元震動”から発生した土地が丸ごと移動してしまう“次元転移”までである。そして今回起きた次元震は、かなり大きかった。

クロウ（やばいな…かなりデカイぞ）

しかしクロウ達の心配を余所に次元震はそのまま縮小していった。謎の怪物を残して…

クロウ「あれは…、次元獣…。」

「W・L・F・く世界解放戦線く」（後書き）

まずはW・L・F撃破です。戦闘シーンがあつという間に終わってしまいました。戦闘シーンはかっこいいけど描くのは難しいですね。

## 「次元獣」(前書き)

クロウとブラスタの活躍でWLFを撃退に成功したが、突如起きた次元震によって招かざる客がやって来てしまったのであった…

## 「次元獣」

クロウ「次元獣：、また厄介なもんが来やがったぜ。」

次元獣・・・

それは何処からともなく次元の彼方から現れる恐竜の様な姿をした怪物である。

さらにその怪物はコミュニケーション不可能で、現れると周りの物すべてを破壊する

「第一級危険災害」として扱われている。

クロウ「来ちまったもんは仕方ねえ、早いとこ片付けるか！」

トライア「それなら好都合だ。」

クロウ「好都合？」

トライア「そいつの正式名は『対MD撃退用機動兵器 ナンバー0』、つまりそいつは元々次元獣と戦うために作られた機体なのさ。」

クロウ「けどさっき見た限りじゃ少し力不足だが？」

トライア「そりやまだそいつの機動力を完全に出してないからさ。

いまリミッターを解除するよ。」

そういつて解除ボタンを押した瞬間、ブラスタはとんでもないスピードで次元獣の所まで駆っていったのである。

クロウ「うおあ！？」

トライア「どうだい、乗り心地の方は？」

クロウ「いやもうすげえなこいつは…。まあこれなら何とかはなりそうだな。」

トライア「じゃあ、期待してるよ。」

クロウ「ったく、しょうがねえな。そいじゃ、いくぜブラスタ！！」そしてそのまま次元獣の群れを次々と狩っていったのである。

しかし思ったより数は多く、リミッターを解除したブラスタでも苦戦を強いられてしまっている。

クロウ「クソ！さすがにちと多すぎる。」

だがその時、謎の機体が現れたのです。

五飛「……………」

クロウ「なんだ、あの機体は？」

五飛「弱いな。」

クロウ「！」

五飛「だが無視はできん。行くぞナタク！正義に敗北は許されん！」

ナタクと呼ばれし機体が放った火炎放射により、残りの次元獣達も業火に焼かれていったのであった…

クロウ「す、すげえ…」

五飛「……………」

クロウ「いやあ、助かったぜ。あんたは一体？」

だがクロウが聞く前に謎の機体は何処かに去っていったのであった。

クロウ「礼も言わずか、まあいいか。」

トライア「お疲れさん、なかなかやるじゃない。」

クロウ「まあこれぐらいは朝飯前よ。」

トライア「ところでさっきの機体はあんたの知り合い？」

クロウ「いや、俺も始めて見たぜ。ありや一体…？」

トライア「まあこのご時世だからね、どっかで誰かが兵器を作ってもおかしくはないよ。」

クロウ「…………あのさあ」

トライア「なんだい？」

クロウ「こっぴつちゃ何だが、御礼を金に両替してくんねえか？」

トライア「はあ!？」



## 「次元獣」(後書き)

今日はガンダムWの五飛初登場です。

## 「動き始めた運命」(前書き)

スコート・ラボと周辺の町を襲撃したWLFと次元獣を撃破したク  
ロウはラボに戻り、ブラスタの開発責任者であるトライアに事情を  
説明するのであった…

「動き始めた運命」

トライア「なるほどね、それで急に金の話になったんだね。」

クロウ「いやあ、面目ない。」

トライア「ほんとだよ。ところでいくらなんだい？あんたの借金。」

クロウ「100万G。」

トライア「はあ！？100万！！まさかそれをあたしにせがもうとしたのかい？」

クロウ「ぶっちゃけて言えば……」

トライア「呆れた……とんだ守銭奴だよ。」

ゼニトリ「おい、兄ちゃん。」

クロウとトライアの会話に割り込んできたのは、クロウに借金の返済を迫っていた借金取りのゼニトリだった。

クロウ「お、あんた無事だったか。」

ゼニトリ「まあな、さっきは助かったぜ。」

クロウ「お！じゃあ……」

ゼニトリ「言っとくが借金チャラは無しだからな！」

クロウ「ちつ。」

ゼニトリ「とりあえずあんたにはPMCにでも入ってもらっぜ。」

クロウ「PMCにか？」

PMC、早い話が民間の傭兵部隊である。

ゼニトリ「あんたの腕なら問題ないって。」

トライア「ちよつと待ちな。」

ゼニトリ「何だよ姉ちゃん？」

トライア「ハイ、100万G。これでいいんだろ。」

ゼニトリ「あらま、こりやまいど。おい兄ちゃん、良い人に出会えたな。」

クロウ「なんだ、もう行くのか？」

ゼニトリ「金さえもらえりやもうあんたにや用はないよ。」

クロウ「ちよつと待った！」

ゼニトリ「な、なんだよ？まさか仕返しなんて言うつもりじゃ…」  
クロウ「達者でな、無事を祈ってるぜ。」

ゼニトリ「…へ、最後はかつこよく決めちゃってくれるじゃないの。」

そう言つて、ゼニトリはラボを後にしていったのである。

クロウ「ふっ、決まつたぜ」

トライア「何気取つてんだい、あたしが払った分はちゃんと返してもらつからね！」

クロウ「え！マジで。ただで払つてくれたんじゃ…」

トライア「ふざけんじやないよストコドッコイ！そんなうまい話があるか（怒）」

クロウ「…ごもつともで…」

トライア「とりあえずあんたにはこれからプラスタのテストパイロットとしてみっちり働いてもらつからね。」

クロウ「はい。」

トライア「とりあえず、あんたは格闘と射撃、どっちが得意？」

クロウ「俺はどっちでもいけるぞ。」

トライア「OK、じゃあどっちの能力もあげておくね。」

こうして、クロウの借金返済生活が始まったのである。

## 「動き始めた運命」(後書き)

第一章、完成です。

くクロウの現在借金は、現在100万Gく

## 世界情勢（前書き）

クロウの初戦も無事に終え、一段落はついた、さて皆さんにこの世界の状況をご説明しよう。

## 世界情勢

この多元世界は時空変動からすでに20年が経過しており、日本列島と月（月と陰月）が2つずつ存在している。アフリカ大陸の一部と陰月は次元の歪みで侵入不可領域となっており、アフリカ大陸の一部は「暗黒大陸」と呼ばれている。世界は三大勢力と呼ばれる「ブリタニア・ユニオン」、「人類革新連盟（人革連）」、「AEU」の三大国にほぼ分割されており、宇宙にはコロニー群が存在するが、実質的にそれらも三大国の支配下にある。地球上には軌道エレベーターが3基建造されており、オービタルリングが地球を囲んでいる。アストラギウス銀河のギルガメス軍およびバラント軍・並行世界からの超長距離移民船「アイランド・1」は本編開始より2年前に発生した次元震で新たに地球圏に参入しており、ギルガメス軍・バラント軍は両軍とも傭兵集団に転身している。アイランド・1は1国家として正式な国家として認められる。よって正式には4大国として分割されている。

### 4大勢力

#### ブリタニア・ユニオン

ブリタニア帝国とのユニオンが合併した、北米大陸を中心とする勢力。首都は帝都ペンドラゴン。元首はシャルル・ジ・ブリタニア皇帝が、首相をユニオンのブライアン・ステッグマイヤーが務めている。南東側の日本列島を含む16の国を「エリア」として支配している。ユニオン製MSとブリタニア製KMFで構成された軍隊を持つ。

#### エリア11

南東側にある日本の名称。住民達は「イレヴン」としてブリタニア・ユニオンに虐げられている。数年前の次元震で参入したギルガ

メス軍が傭兵としてたむろしている。シンジュクゲッターでは、治安警察がレジスタンスの取り締まりを行っている。

## 人類革新連盟

通称「人革連」。ロシア、インドなどのアジアを中心とした勢力。中華連邦を内包しているものの、勢力内の足並みは揃っていない。人革連製MSと中華連邦製KMFで構成された軍隊を持つが、中華連邦製KMFはテロリストが主に使用するだけで、人革連としては殆ど使われていない。

## A E U

ヨーロッパ勢力。ロームフェラ財団が存在し、OZを特殊部隊として抱える。A E UとOZのMSで構成された軍隊を持つ。軍事面でのトップはトレイズ・クシュリナーダが務めている。

## アイランド・1

船団住民の半数にあたる約500万人が生活する巨大居住艦。天窓式のドームに開閉式の防護シエルを持つ。その全長は約15kmと従来艦の約2.5倍に相当する。地上面からドーム最上部までの高さは約2,000m。構造材を軽量化するため、艦内の人工重力は0.75Gに設定されている。地表の居住区には港湾部・市街地・丘陵地帯などがあり、地下には歓楽街や物資備蓄スペース、避難シエルター、さらにその下には動力部や環境・重力維持のための装置が備えられている。

## エリリア 地区

## 渋谷エリリア

東京の渋谷を再現した繁華街。ファッションビル119 109など若者に人気の商業施設が立ち並ぶ。



## 世界情勢（後書き）

とりあえず、一通りの国の情勢を説明しました。なお、ブリタニア・ユニオン、人革連、A E Uは冷戦状態ですが、アイランド・1は宇宙にある国家なので、戦場になる事はありません。

## 参戦作品

無敵ロボ トライダーG7

六神合体ゴッドマーズ

獣装機攻ダンクーガノヴァ

超重神グラヴィオンツヴァイ

真(チェンジ!!)ゲッターロボ(世界最後の日)

真マジンガー 衝撃!Z編

地球防衛企業ダイ・ガード

天元突破グレンラガン

劇場版 天元突破グレンラガン 紅蓮篇

トランスフォーマー アニメイテッド

新機動戦記ガンダムW(TV版)

機動戦士ガンダムOO 1st season

装甲騎兵ボトムズ

装甲騎兵ボトムズ ザ・ラスト・レッドショルダー

装甲騎兵ボトムズ レッドショルダードキュメント

野望のルーツ

マクロスF

劇場版マクロスF (イツワリノウタヒメ)

コードギアス 反逆のルルーシュ

交響詩篇エウレカセブン ポケットが虹でいっぱい

宇宙をかける少女

バンプレストオリジナル

## 参戦作品（後書き）

今回はこの物語の参戦作品をご紹介しましたが、もしかしたら増える予定もあります。

「動き出す者達」(前書き)

スコート・ラボでテストパイロットに任命されたクロウ。しかし彼らが知らない所で動き始めた者たちもいた。これはその者達を描いた新たな物語である。

「動き出す者達」

「宇宙空間」

クリス「マイスター達のMS、すべての起動準備完了しました。」

ラッセ「OK、こつちも準備完了だ。」

フェルト「トレミーの調整も全て完了しました…」

イアン「しかしトレミーまで出しちまうとは…」

スメラギ「仕方ないわ、事態はそれだけ急を要することなのだから。」

クリス「全ての準備整いました。スメラギさん、お願いします。」  
スメラギ「ええ、わかったわクリス。これよりソレスタルビーイングは次の行動を開始します。マイスター達は直ちにガンダムに乗り込んで待機してください。トレミー、発進!!」

「エリア11 学園クラブハウス内」

ナナリー「それじゃあ、おやすみなさい、お兄様。」

ルルーシュ「ああ、お休み、ナナリー。」

そう言くとルルーシュという名の青年は、メイドの咲世子に妹のナナリーを任せ、2階の自室に戻っていった。

???「遅かったな、妹との会話は済んだか、坊や。」

ルルーシュ「黙れ、魔女。ところでちゃんとカレン達には今度の作戦は伝えたのだろうな? C・C・?」

C・C「ああ、ちゃんと伝えたぞ。」

ルルーシュ「よし、これで明日の計画は完璧だ。問題は…」

C・C「今度こちらに来るスーパーロボットの連中か。」

ルルーシュ「だが問題ない、俺にはこのギアスがあるからな…」

C・C「なら精々頑張れよ、“ゼロ”よ。」

「日本 羽田国際空港」

赤木「お、ワツ太じゃねえか！」

ワツ太「あ、赤木さん！もう来てたんだ。」

赤木「まあな、あれ？専務達は来てないのか？」

ワツ太「ああ、専務達は別の仕事で今日は来れないんだ。」

赤木「じゃあ“竹尾ゼネラルカンパニー”はワツ太一人だけかよ？」

ワツ太「まあでも大丈夫さ。だって俺は社長だからな！」

いぶき「偉いわねワツ太は。赤木君もちょっとは見習いなさいよ。」

青山「そうそう、いい大人なんだからな。」

赤木「んなもん言われなくてもわかってるよ。なんせ俺達は“21

世紀警備保障”の社員だからな！」

甲児「相変わらず元気ですね。」

赤木「よう、甲児！タケルも一緒か。」

甲児「はい、この間は色々お世話になりました。」

赤木「いやいや、いいのいいの。」

タケル「皆さん、そろそろ出発しないと。」

赤木「本当だ！やっべえ。」

いぶき「それじゃあ、行きましようか。」

ワツ太「おー。」

タケル「・・・」

甲児「どうしたタケル？」

タケル「ちよつと気になる事があってね・・・」

甲児「気になる事って？」

タケル「いや、なんでもない。早く行こうか。」

甲児「おう！」

くドラゴンズハイヴく

田中「いや、チームDの皆さん、お疲れ様です。今回もいい活躍で。」

葵「それはどうも・・・」

田中「皆さんお疲れでしょう、ゆっくり休んでください。明日は中

々の大仕事になりそうですから。」

くらら「明日もどこかの有利な勢力と戦うの?」

田中「それがダンクーガノヴァのやるべき事ですから。」

葵「それで、今度はどこに行ったらいいの?」

田中「エリア11ですね。」

朔哉「エリア11、あそこって確か…」

ジョニー「謎の怪人『ゼロ』率いる“黒の騎士団”の話で持ちきりになっている島ですね。」

くらら「まさか黒の騎士団と戦えって言っくんじゃあ…」

田中「いえいえ、その逆です、皆さんには、ゼロの手助けをしてもらうのですよ。」

葵「あれ、でも今はゼロが優勢に立ってるんじゃあ?」

田中「どうやら今度の相手は、コーネリア率いるブリタニア・ユニオン軍のNMF・MSとPMCのレッドショルダーが協戦するらしいので。」

朔哉「常勝のコーネリアと一騎当千のレッドショルダーが相手とは

…」

ジョニー「それならゼロに加担する理由も納得ですね。」

葵「OK、わかったわ。明日は今までにない刺激がありそうね。」

く早乙女研究所く

武蔵「しかし博士も無茶言うよなあ。まさかエリア11で人暴れしてこいとはよ。」

隼人「博士の話じゃあインベーターがああ辺りに来ていると言っていたらしいが…」

武蔵「んなことになったら大惨事じゃねえか!」

隼人「おそらくNMFやMS・ATでは歯が立たんだろうな。」

竜馬「へっ、何処だろうが関係ねえ!インベーターは俺達ゲッターチームがぶっ潰す!!!」

武蔵「お、張り切ってるな、竜馬。」

隼人「その張り切りが余計なトラブルを呼ばなきゃいいがな。」

「サンジェルマン城」

琉菜「じゃあ次にゼラバイアが現れるのは…」

ミズキ「ここ、エリア11みたいね。」

エイナ「こんな所でゼラバイアが現れたら大変ですよ！」

斗牙「此処はそんなに人が多いの？」

エイジ「それだけじゃねえ、ここには貴族や皇族なんかのお偉いさんがいるからな。その人達になんかあったら国際問題になっちゃうぜ。」

リイル「それはまずいと思います・・・」

エイナ「そう言えばそこはゼロという人もいましたね。」

エイジ「いや、さすがに噂の怪人でもゼラバイアはキツイだろ。」

ミズキ「じゃ、やる事は一つね。」

斗牙「ああ、ゼラバイアは、僕達グランナイツが討つ！」

そして、来るべき、5月15日・

大いなる戦いが始まる…



「動き出す者達」(後書き)

新シリーズのプロローグみたいなものです。

状況を説明しますと、ルルーシュがコーネリアとフジ決戦をする前日です。

そこにガンダムやスーパーロボットが入ったらルルーシュが圧倒的に有利なので敵もたくさん入れてみたらかなりやばい事になったかも・・・

## 「クロウ、エリア11へ飛ぶ」(前書き)

少々待たせてしまってますいません。今日から新シリーズです。まあ皆さん、ゆるくお付き合いください。

## 「クロウ、エリア11へ飛ぶ」

クロウ「最近よお、うちの嫁がさあ、もつと稼いで来いってうるさいんだよ。俺もさあ、一生懸命頑張ってはいるんだけどなあ…、不景気って残酷だよなあ。よし！今日は朝まで飲むぞー！！オヤジ、がんもとこんにゃくと…」

トライア「って何やってんだお前はー！！！！」

トライアが何故か持っていたでかハリセンで、クロウが張り倒されたのである。

いわゆるツツコミである。

トライア「まったく、ツツコミ所が多すぎてどっから突っ込めばいいのかわかりやあしないよ（怒）」

クロウ「な…ナイスなツツコミで…」

トライア「ほら、さっさと立ちな。今から仕事をしてもらうんだから。」

クロウ「また次元獣退治か？」

ブラスタは元々対次元獣用なので次元獣の討伐に回されるのは不思議ではないが、クロウは少々マンネリ化していたのである。

トライア「いや、あんたには今からエリア11に行ってもらうさ。」

クロウ「エリア11？またなんで…」

トライア「あんたも“ゼロ”やその組織の事は知っているだろ。」

クロウ「まあな。」

ゼロとは、前エリア11総督であるクロヴィス殿下を暗殺し、エリア11のブリタニア・ユニオン軍と激戦を繰り広げているレジスタンス『黒の騎士団』の首領である。ただ、仮面とマントを被っているため、正体はおるか、性別なども不明なのである。

クロウ「なんだ、黒の騎士団の戦闘データでも撮って来いっていいのか？」

トライア「いや、今回の仕事は黒の騎士団とは関わったりはしない

さ、ただ、一応注意はしておいた方がいいと思ってね。」

クロウ「？」

トライア「この間こつそり手に入れた極秘情報なんだけど、黒の騎士団の所には今、コロニーのガンダムとギルガメスの兵、おまけにダンクーガもいるらしいよ。」

クロウ「マジか！？エライ組み合わせじゃあねえか。」

トライア「コロニー解放を目的とするコロニーのガンダム、有利な方の敵になるダンクーガ、そして傭兵部隊の陣営の一つであるギルガメスの兵、そしてエリア１１の解放を目指す自称“正義の味方”の黒の騎士団：はつきり言つてとんでもない組み合わせさ。」

クロウ「そんなメンバーと戦わされるブリタニア・ユニオンも気の毒に。」

トライア「そうでもないさ。あつちはあつちで常勝のコーネリアにレッドシオルダーもいるらしいからね。」

クロウ「あゝ、それだったら納得。」

トライア「まあどっちにしてもかなりの被害が出るのは確かだね。」

クロウ「じゃあなんだ？もしかしてスーパーロボットの手伝いか？」

今エリア１１ではとある建物の建設のために、もう一つの日本から有名な企業会社『竹尾ゼネラルカンパニー』や『21世紀警備保障』などが来る事になっているのである。

クロウ「噂じゃクラッシャー隊やマジンガーって名前のスーパーロボットまでいるって話だ。だがそんなにくだつたら俺必要か？」

トライア「違う違う、それでもないよ。」

クロウ「はあ、じゃあ何しに行くんだ俺は？」

トライア「実はね、これはまだあまり知られていないんだけど、エリア１１にソレスタルビーイングが向かっているという情報が入っているんだよ。」

クロウ「なんだって！」

ソレスタルビーイングとは、すべての紛争に武力介入を行うという宣戦布告を宣言し、実際起動エレベーターのテロの撃退や内戦の制

圧も行っているらしいのである。

トライア「そこであんたにはソレスタルビーイングの調査を行ってほしいのさ。」

クロウ「えらい無茶を言ってくれるぜ…だが、やるからにはきちんとやるぜ。」

トライア「報告楽しみにしてるよ。」

クロウ「ま、期待しないで待っていてくれ。」

その翌日、クロウはブラスタを乗せた小型船でエリア１１に向かって行ったのである。

「クロウ、エリア11へ飛ぶ」(後書き)

今回から新章突入です。

「正義、解放、刺激、傭兵」(前書き)

クロウがエリア１へ出向する前日、ある組織のある計画の最終確認が行われていた。

## 「正義、解放、刺激、傭兵」

「シンジクゲットー 黒の騎士団アジト」

デュオ「えーと、おいカレン、これは此処でいいのか？」

何かを確認するために訪ねたおさげ髪の少年は、コロニーから来たガンダムパイロットの一人、デュオである。

カレン「ああ、それは重要な物だから大切に扱ってよね。」

強気な発言をする赤髪の少女、カレンは、デュオにそう注意しながら作戦の準備に取り掛かっていた。

デュオ「所でよ、カレン、今回の作戦は大丈夫なのか？」

カレン「何よ急に……」

デュオ「いや確かにこの作戦はすごいが、失敗したら敵だけじゃなくて周りの町も被害が出るぞ？」

デュオが心配している作戦とは、敵を指定した位置までおびき寄せ、用意したサクラダイトの爆弾で山を爆発させ、土砂崩れを起こして敵の数を減らす。という作戦なのだが、その山の近くには町があり、失敗すれば大勢の民間人を巻き込みかねないのだ。

カトル「そうならないようにするのが今の僕たちの役目ですよ。」

金髪の青年、カトルが心配するデュオを慰める。

葵「そうそう、あたし達がいっしょにしないとね、カレン。」

カレン「もちろんだとも。今の私達は正義の味方なんだ！民間人を巻き込んでたまるもんか。」

ダンクーガのパイロットである葵の励ましに、なおさら気合いが入るカレンだった。

デュオ「そう言えば他のメンバーは？」

カトル「ヒイロとトロワは作戦地域の確認、扇さんや他の騎士団は機体の整備、ジョニーさんはゼロと作戦の内容確認をとっています。朔哉君とくらはさんは町の様子を見に行っています。」

デュオ「OK。ってあれ、キリコは？」



カレン「キリコも自分の機体のチェックをしているよ。」

デュオ「まあ、AT乗りにとってATは自身の棺桶みたいなもんだからな、ちゃんと見ておきたいんだな。」

彼らが話しているキリコという人物は、一週間前、ゼロと協力関係にあるアストラギウスの人間であるゴウト・バニラ・ココナがパドリングと呼ばれるAT・NMFの裏格闘技で使っていたAT乗りであるが、今は騎士団の戦力として活躍している。

デュオ「よし、準備完了だ。」

葵「こっちもOKよ。」

カレン「じゃあみんな、明日もよろしくね。」

そう言ってカレンを除く全員が部屋から退出していった。

カレン（明日は大切な戦いだ、絶対に負けるもんか…！）

そうして黒の騎士団とその協力者たちの夜は更けていった…

## 「正義、解放、刺激、傭兵」（後書き）

まずは黒の騎士団の戦闘前夜です。ちなみにタイトルについては、正義がコードギアス、解放がガンダムW、刺激がダンクーガノヴァ、傭兵がボトムズのイメージです。

## 「民間人の思い」（前書き）

運命の日、とある場所では、もう一つの日本から来たスーパーロボ  
ット達が建設作業を行っていた…

## 「民間人の思い」

トウキヨウ疎開

甲児「赤木さん、これはこっちでいいんですよね？」

赤木「ああ大丈夫だ。それとこれ運ぶの手伝ってくれ甲児。」

甲児「わかりました。」

建設材料を運んでいたのは、マジンガーと呼ばれるロボットに乗る少年、兜甲児と民間企業用として作られたスーパーロボット、ダイ・ガードに乗っているサラリーマン、赤木俊介である。

ワツ太「赤木さん、こっち終わったよー。」

赤木「サンキューワツ太。じゃあこれ運び終えたら休憩タイムだ。」

ワツ太「ヤッター！じゃあ郁絵ちゃん達に知らせてくるね。」

赤木「よっし、甲児、さっさと終わらせ……」

甲児「こっちはもう終わりました。」

赤木「早っ！！凄いな甲児、もうだいぶマジンガーを使いこなせてるじゃないか。」

甲児「いや、まだまだだよ。もっとうまく扱えるように頑張らないと、お爺ちゃんも心配するから。」

彼の祖父、兜十蔵は、Dr・ヘルと呼ばれる男が率いる機械獣と鉄仮面軍団の戦いの中で、甲児にマジンガーZを託して亡くなってしまうのである。

赤木（爺さんを失った時はだいぶ落ち込んでいたけど、もう大丈夫のようだな……）

ワツ太「赤木さん、甲児さん、おやつの用意が出来たよ。」

赤木「おっし、じゃあ休憩にしますか。」

甲児「はい。」

梅麻呂「郁絵くん、今日のおやつは何かね？」

郁絵「皆さんの元気が出るどら焼きです。」

赤木「お、いいねえ。疲れた時は甘いもんが一番ってね。」

いぶき「もう、調子いいんだから。」

青山「ま、そこがそいつの取柄みたいなもんですからね。」

さやか「甲児君、お疲れさま、はいお茶。」

甲児「ああ、ありがとう、さやか」

一緒に休憩しているのは竹尾ゼネラルカンパニーの社員、梅麻呂専務・郁絵・厚木・木下と、21世紀警備保障の社員でダイ・ガードのサブパイロットであるいぶき・青山、そしてマジンガーと同じ超合金でできたアフロダイAのパイロット、弓さやかである。

彼らは現在、合同作業として同じ仕事を手伝っているのである。

ちなみに実はもう一人彼らの仕事を手伝っている人がいるのだが：

ワツ太「あれ、タケルさんは？」

甲児「あれ？さっきまでいたんだけど…」

郁絵「タケルさんなら向こうで休憩してましたよ。」

ワツ太「そっか。じゃあ俺タケルさんにどら焼き分けてくるよ。」

タケル「……………」

ワツ太「タケルさん。」

タケル「ワツ太か、どうしたんだい？」

ワツ太「これ、どら焼きのおすそ分け。」

タケル「ああ、すまない。」

ワツ太「どうしたのタケルさん？なんか元気ないけど。」

タケル「……………」

ワツ太「もしかして、ギシン星の人達が気になるの？」

ギシン星とは、超能力を使い地球侵略をたくらむ異星人の事である。この明神タケルも実はギシン星人で、彼は地球を破壊するために反陽子爆弾と共に送られてきたのである。だがタケル自身が地球を愛

していたため、皆で地球を守る事になっているのだ。

タケル「いや、そっちは今のところ向こうのクラッシャー隊から問題ないとの通信が来ているから大丈夫だ。」

ワツ太「じゃあ何で悩んでるの？」

タケル「俺が気になっているのは…」

甲児「エリア１１にいるゼロの事だろ。」

タケル「赤木さん、それに甲児も。すみません、心配をかけて…」

赤木「いいのいいの、ぶっちゃけ言つと俺達も気になっちゃってさ。」

「

ワツ太「赤木さん達も？」

甲児「ワツ太もかい？」

ワツ太「だって気になるじゃないか。同じ国の人間なんだし。」

赤木「そうだな…」

ワツ太「それにゼロがどんな顔してるのか気になって気になって。」

赤木「つてそっちかよ！」

ワツ太「え、違うの？」

甲児「タケルが言いたいのは、俺達がゼロと戦うかもしれないって

ことさ。」

ワツ太「ええ！マジかよ！！」

タケル「今俺達がエリア１１にいる以上、彼らと関係ないことはな

いから…」

甲児「確かに彼らと戦うのはちょっと…かといって協力すれば俺達

もテロリスト扱いされちゃうしな。」

タケル「……………」

甲児「……………」

赤木「はいはい、辛気臭い顔しない。まだ仕事をしなくちゃならな

いんだからな。」

タケル「…そうですね、早く仕事を終わらせましょう。」

ワツ太「ところで赤木さん、次はどこで作業するんですか？」

赤木「え〜と確か、ナリタだな。」

そうして彼らは運命によって出会うことになる。  
もう一つの日本の戦いに巻き込まれながら・・・

## 「民間人の思い」（後書き）

今回は日本組のお話です。彼らは今仕事でエリア１１に來ています  
が、もうじきある戦いに巻き込まれていくのです。



「巻き込まれし運命（さだめ）」（前書き）

東京疎開の仕事を終えた赤木達は、次の作業現場であるナリタに向かっていた。

「巻き込まれし運命（さだめ）」

「ナリタ山脈付近」

甲児「今日の作業はどんな予定ですか？」

赤木「そうだな、この間と同じで、建設作業の手伝いだな。」  
ワツ太「それならすぐに終わりそうだな。」

移動する車の中でのんびりしている赤木達の所に、監督責任者である城田が話に入ってきた。

城田「一樣は仕事だ。ちゃんとしろ。」

赤木「大丈夫ですよ城田さん。現場作業はいつも本気ですから。」

青山「そのやる気を机作業の方でも出してほしいもんだな・・・」  
青山が皮肉な言葉を言った。

その時、赤木達が乗っていた車が止まってしまったのである。

赤木「あれ？もう着いたのか？」

タケル「いや、まだ目的地は先だけど？」

城田「ちよつと待て、私が様子を見に行ってくる。君達は此处で待機だ！」

そう言つて城田が車を降りれば、車の前に歩道を封鎖していたブリタニア軍が何人もいたのである。

城田「すみません、何かあったのですか？」

ブリタニア軍「何だお前は？誰の許可でここに来た！」

城田「失礼、私は城田、21世紀警備保障の責任者だ。なぜこの道を封鎖しているのですか？」

ブリタニア軍「ふん、あいにく民間人に教える事ではない、帰れ！」  
部隊の隊長らしき人物に軽くあしらわれてしまう。

その様子を赤木達はこっそり見ていた。

いぶき「なによあれ、感じワルう。」

ワツ太「ほんとだよ。何があったかぐらい教えてくれたっていいじゃないか。」

タケル「まさか・・・」

メンバーが嫌悪している中、タケルだけは何か嫌な予感を感じていた。

城田「事情さえ話していただければ我々はすぐにここを去りますので。」

ブリタニア軍「黙れ！イレブン風情が生意気な！！」

隊長の男は、顔を歪めてそう言い捨てた。

城田「イレブン・・・？ちよつと待って下さい！何か勘違いされているようですが、我々は此処の国の者ではありません。」

ブリタニア軍「そんなこと知った事か！失せないのなら・・・」

男は懷から銃を取り出し、城田へ向けた。

赤木「城田さん！」

甲児「やめろ！相手は民間人だぞ！」

甲児たちが飛びかかるうとしていたその時、

兵士「隊長！」

遠くの方で部隊の人らしき人物が男を呼び出す。

ブリタニア軍「何だ？」

兵士「山頂の方から黒の騎士団が出現！それに日本解放戦線の兵士である藤堂鏡志郎と四聖剣も一緒です。」

ブリタニア軍「何だと！」

藤堂鏡志郎とは、7年前に起きた極東事変で唯一ブリタニアに泥を塗った日本軍人である。かつては日本解放戦線にいたが、どうやら今は黒の騎士団というようだ。

兵士「それとコーネリア殿下からの伝言で、封鎖部隊の隊長達は直ちに本隊と合流するようにと。」

ブリタニア軍「ええい仕方ない！私と一部隊は本隊と合流し、殿下のもとに急ぐのだ！」

兵士「あの一、私は・・・？」

ブリタニア軍「全員が行ってどうする！おまえは此処で居残りだ！」  
兵士「りよ、了解しました！」

隊長の男はそう言つて連絡した兵士を残して、自分の部隊全員で山奥に向かつて行つた。

赤木「ふう、良かった。一時はどうなる事かと。」

甲児「大丈夫ですか、城田さん？」

城田「私は問題ない。だが……」

どうやら作業はできない状況であることを城田は悟っていた。

城田「各員は撤収準備！今日の仕事は中止だ！」

ワツ太「ありやま、今日は休業になっちゃったよ。」

梅麻呂「私達にとっては一大事！」

城田「現状が現状だ！やむを得まい。」

郁絵「城田さん、大変です！ナリタ上空で界震が！」

城田「何っ！こんな時にか。」

いぶき「ちよつとどうするのよ？」

木下「行くにしてもナリタは今、騎士団とブリタニア軍の戦闘地になつていますし……」

甲児「けどヘテロダインはNMFじゃあ倒せませんよ。」

彼らの言うとおり、ヘテロダインは、核コアと呼ばれる心臓部分を壊さねば再生してしまう怪物なのである。

赤木「だったらやる事は一つ！俺達もナリタに向かうぞ！」

さやか「ええー……！」

城田「おい待て赤木！我々が言つたら邪魔になるだけだぞ！それに戦場では何が起こるかわからんぞ！」

赤木「その時は気合と根性でカバーだ……！」

大声で叫ぶと、赤木は乗っていた車を運転し、封鎖ゲートを破壊する。

赤木「いぶきさん、青山、早く行きますよ！」

いぶき「仕方がないわ、行くわよ、皆！」

青山「お、おい！冗談だろ！」

甲児「どうします、タケルさん。」

タケル「こうなったら仕方がない、俺達も向かうぞ！」

城田「おい！ちよつと待て…」

城田が制止する前に、赤木達を乗せた車はそのままナリタへ向かっていた。

梅麻呂「ああ、社長おゝ。」

木下「私達を置いてかないでえゝ。」

兵士「ああ、なんて事を！俺が隊長に殺されるー！」

城田「まったくあいづらは…、申し訳ありません。後できちんと謝罪いたしますので。」

詫びをし、城田と梅麻呂達は車を追いかけて行った。

兵士「ど、どうしよう・・・」

兵士が茫然とした様子でその場に立ちすくんでいた時、一本の電話が入って来た。

兵士「はい、なんでしょう。」

ブリタニア軍「何をやっている！早くコーネリア殿下に伝えるのだ！」

兵士「へ、何をです？」

ブリタニア軍「エリア１にソレスタルビーイングと、所属不明の機体が幾つか入国したのだ！」

兵士「ええ

！！」

「巻き込まれし運命(さだめ)」(後書き)

ついにナリタにやってきました。此処からドンドンいろんなキャラが出てきます。

## 緊急のお知らせ

只今、自分のPCがインターネットに繋がらなくなったため、次の更新はしばらく未定になります。ご迷惑をおかけします> <?土下座

いつ治るかは不明ですが、PCが使えるようになり次第、きちんと物語も進行しておきますので、どうかしばらくお待ちください。

なお、感想やメッセージは何か出来ますので、何かメッセージがあれば遠慮せずに言っちゃっても構いません。

この小説の続きを楽しみにしてらっしゃる皆様方には大変ご迷惑をおかけして誠に申し訳ありません。

## 「ナリタ戦線」(前書き)

ナリタ戦地で起きた界震の調査をするため戦場へ乗り出す赤木達。  
一方、ナリタ攻略を行うために戦線に出たコーネリア達にも思わぬ  
朗報が飛び込んできたのだった…



## 「ナリタ戦線」

「ナリタ攻略戦 前線基地指令室」

コーネリア「何っ！ソレスタルビーイングが。」

ギルフォード「はい。それと未確認の機体もいくつかこちらに向かって来ているらしく」

コーネリア「ええい、ただでさえ騎士団共に手を拱いているというのに！」

前線基地では、黒の騎士団との戦いの為に指揮をとっている第2皇女コーネリアがいつにもまして厳しい表情で情報を聞き出していた。コーネリア「ソレスタルビーイングは、両方の勢力を潰すつもりなのか？」

ギルフォード「それはまだ分かりませんが、その可能性は高いと思われる。」

コーネリア「くっ、各部隊隊長達とグラストンナイツ達に伝える！ソレスタルビーイングの迎撃準備をさせるのだ！奴らにエリア11の地を踏ませるな！！」

ギルフォード「未確認の機体はいかがいたしましたしょう？」

コーネリア「当然！無断で入るような狼藉者も排除しろ！！」

リーマン「お待ち下さい、コーネリア閣下」

コーネリアの命令に異議を唱えたのは、傭兵部隊「レッドシヨルダ」の最高司令官、リーマン将軍であった。

ギルフォード「貴様！姫様の命令に逆らうか！」

リーマン「そうではありません、未確認の機体の方は迎撃する必要はございません。」

コーネリア「どういうことだ？」

リーマン「機体の正体は此方で既に調査済みです。まだ片方しかわかっていませんが、3機の飛行機らしき機体は「ゲッターロボ」と呼ばれているものです。」

ギルフォード「ゲッター？確か日本の早乙女博士が開発したという対インベーター兵器ですか？」

リーマン「そうです。そして、奴らが来ているという事は、おそらく此方の方にインベーターが来ているかもしれせん。」

コーネリア「何だと！あの化け物までこちらに向かって来ているのか！？」

リーマン「そちらはまだ調査中ですが可能性は高いでしょう。そうになったら下手に我々の部隊を入れるのは防衛ラインを崩してしまい、ゼロに隙を作ってしまうことになります。」

コーネリア「どの道不法侵入機も化け物も入れてしまうということではないか！」

リーマン「ですがこの情報はまだこちらにしか入っておりません、そこで、彼らを騎士団のテリトリーまで誘導するのです。」

ギルフォード「なるほど、騎士団とゲッター、インベーターをぶつけるという事ですな。」

コーネリア「ちょっと待て、ゼロがインベーターなどにやられてしまったら、本国に何と言えば」

コーネリア自身も騎士団とインベーターの共倒れは別に構わないしむしろ大歓迎なのだが、そしてゼロ討伐の手柄を最悪ゲッターに奪われてしまいは人の手を借りないと反逆者一人も倒せない無能者として本国に扱われてしまう屈辱をコーネリアは我慢ならなかったのである。

リーマン「それならご心配なく、向こうにも幾人か腕の立つ者が何人かいたようですし、ゼロがあれしきの連中で殺されることはないでしょう。インベーターを倒すのに疲労した連中を叩くもよし、インベーターに部下を殺され、独り身になった所を拘束すればよし、やり方を考えれば、閣下に汚名を付けずに、成果を出せます。」

コーネリア「くっ……」

リーマン「彼らの誘導役は我々レッドシオルダーが引き受けましょう。閣下の有能な騎士たちを低俗な化け物ごときに振るうのはもっ

たいたいのですから。」

コーネリア「……わかった、インベーター及びゲッターの誘導は貴様に任せる。」

リーマン「了解しました。では失礼します。」

そう言つて、リーマンは指令室から去つて行つた。

ギルフォード「よろしいのですか？」

コーネリア「いい訳ないだろう！だが、だからと言って私の部下に化け物の相手までさせる必要はないからな。」

ギルフォード「姫様……」

コーネリア「それよりギルフォード、前線にいるダールトン將軍にも伝える、部隊の幾つかをゼロとの戦闘部隊とソレスタルビ・イングの討伐部隊に分ける。その後、騎士団をテリトリー内までに誘導するのだ。奴らを籠の鳥にするのだ！」

ギルフォード「イエス！ユアハインス。」

（前線基地AT用倉庫）

リーマン「コニン少尉、準備は出来たか。」

コニン「はい將軍。既にインベーター誘導部隊とソレスタルビ・イング・ゲッターの討伐部隊は出動しました。」

リーマン「よし、ではコニン少尉は裏道から回つてゼロを監視しろ。絶対に気づかれるなよ。」

コニン「了解！」

コニンは急いで自分のATに乗つて戦場に賭け向けて行つた。

リーマン「どうやら、この戦い、思った以上の物が手に入りそうだな。」

不審な笑みを浮かべるリーマンの手には幾つかの書類がまとめられていた。

リーマン（元トッププレーサーの飛鷹葵にシュタットフェルト家の令嬢、敵島の奇跡までいるか、だがこいつらならどうとでもできる。

問題はこいつらか……）

現在黒の騎士団と共にいる元ギルガメス兵、キリコ・キュービーと…

ルルーシュ・ランペルージの情報書が入っていた

リーマン（ふふ、まさか死んだはずの皇子がまだいたとはな、おまけに王の力も手<sup>ギアス</sup>にしていたか…。ペールゼン閣下、どうやら貴方にはよい土産がありそうです。）

そう、彼は既にゼロの正体を知っていたのである。さらに彼は、ゼロが持っている不思議な力、ギアスの事も既に承知済みなのである。リーマン「キリコ、ルルーシュ・ヴィ・ブリタニア、貴様らの存在、この俺が確かめてやる！」

そして一つの陰謀が静かに動き始める。

## 「ナリタ戦線」(後書き)

今回はブリタニア軍サイドで御送りしました。

更新が遅れてしまい申し訳ありません。とりあえず今は友人のPCを借りて更新させて頂いてます。前より遅くなるかもしれませんが何とぞよろしくお願いします。

「遅れてきた借金まみれ」（前書き）

エリア１１で様々な思いや陰謀が渦めく中、クロウは貨物飛行船で戦場の地へと向かっていた。

「遅れてきた借金まみれ」

「ナリタ付近 上空」

クロウ「にしてもえらい状況だな、これは。」

飛行機を操縦しながら黒の騎士団とブリタニア軍との戦争の地となっているナリタの現状を見てクロウは啞然としていた。

所々で無残な残骸となり果てている双方のNMF、水溜りのように溜まっている血の集まりには大量の兵士や騎士団の死体が転がっており、中には頭が粉碎しているものや、下半身が抉り取られた者もあった。生き残っている者達も、NMFでの一方的な弾圧に命を落としたり仲間を失ったショックで正気を失った者も沢山いたのである。

クロウ「こりゃひでえ…どっちもただの殺し合いになってやがる。」

そこでクロウにある疑問が浮かび上がる

クロウ「騎士団のゼロは今までこんなひどい被害を出してはいなかったはずだ…だが今の現状は違う。」

クロウの知っている限りでは、ゼロという人物は最小限の被害、あるいは首領や指揮官を潰して早めに戦闘を終息させるなど、余計な被害を出さないようにしている人なのだ。だが今の被害は最小という言葉では収まりきれないほどの事態となっている。

クロウ「この状況にこの惨劇…まさか」

\*\*\*『こ…らは…タニ…である。そち…所ぞ…を…たえろ…』

クロウ「なんだ？えらく電波悪いな？」

酷いノイズが走って聞き取りにくかったが、どうやらブリタニア軍からの通信だったようである。だが電波が悪いらしく、通信はすぐに切れてしまう。

クロウ「なんか嫌な予感がするぜ、すぐに調べてみるか。」

くナリタ山上付近く

ジヨニー「ミサイルデトネイター!!!」

巨大な機体、ダンクーガノヴァのパイロットの一人であるジヨニーが、腰に装着されていたミサイルを数発発射し、敵のブリタニア軍を迎撃する。

朔哉「しつかしよお、いくらなんでも敵多すぎないか？」

ジヨニー「確かに、エリア１の兵力にしては数が多すぎる。本国に増援を要請したのでしょうかね？」

くから「これ以上相手にしていたら合体の制限時間が過ぎちゃうわよ！」

実は彼らが乗るダンクーガは一定時間を超えると機体がオーバーヒートしてしまうため、その前に合体を解除しないといけないのである。

葵「だったらさっさと終わらせるわよ！」

メインパイロットである葵が喝を入れる。

その直後、別の方で敵の相手をしていたカレンから連絡が入って来た。

カレン『葵！大変なのよ！』

葵「どうしたのカレン？」

カレン『ゼロが…、ゼロが…！』

葵「ちよつと落ち着いて。ゼロがどうかしたの？」

カレン『ゼロが何処にもいないのよ！通信もできないし…』

朔哉「まさかやられたんじゃないか…」

葵「そこ！縁起でもない事言わないの！カレン、そっちの敵を倒したらポイント2013で合流しましょう。私達も探すの手伝うから。」

カレン『わかったわ。気を付けてね、葵。』

葵「OK。」

通信を切った後、葵達は改めて気合を入れ直す。



葵「よっしゃ、それじゃあさっさと敵倒して、ゼロ探しに行くわよ」

!!  
L

「！」「！」「！」

「遅れてきた借金まみれ」（後書き）

クロウさん、久々の登場です。戦場はかなり混乱している状況になっております。戦場の状態の伝え方が解りにくかったらごめんなさい。>（――）<

## 「策略家vs傭兵部隊隊長」（前書き）

ゼロと連絡が取れなくなり、混乱する前線の黒の騎士団。実はそれには、ある訳があったのだ。た…

## 「策略家vs傭兵部隊隊長」

「ナリタ山中 樹海」

ルルーシュ「くっ、失態だ……」

苦虫を潰したような顔をする黒の騎士団首領、ゼロもといルルーシュ。実は先程、彼はコニン曹長と名乗るレッドショルダーの戦闘員と奮闘していたのである。もっとも、彼はNMFの操縦は人並みなので、プロの傭兵であるコニンとはマトモに殺り合えば、確実に自分がやられる可能性が高いので、今いる樹海を利用して追手を振りきった所なのである。

ルルーシュ（まさか伏兵が近くにいたとは……、一刻も早くカレン達と合流しなければ……）

黒の騎士団は連日勝利を取ってはいるが、それはルルーシュの戦略とカレン達などの協力者が一緒にいてやっと得た勝利である。なのでそのどちらかが抜けてしまえば、コーネリアやレッドショルダーなどには確実に全滅させられてしまう恐れがあるのだ。

ルルーシュ「何とか動けば……くっ！」

ルルーシュが乗っている無頼改はコニンの襲撃によってかなりダメージを受けてしまい、動けるかどうか怪しい状態だったのである。さらにルルーシュ自身も、襲撃のショックで左肩とギアスを憑依させている左目を負傷してしまったのである。

敵に遭遇する前に自分の陣営と合流しようとしていたルルーシュだったが、不運にも、敵に見つかってしまったのである。

ルルーシュ「しまった！もう見つかったか！しかもあれは……」

どうやら運悪くレッドショルダーらしきATに見つかってしまったのである。肩の形式が他のATと違うところを見て、どうやら隊長機らしい。

ルルーシュ「……？、なぜだ、なぜ襲ってこない？」

何故か敵のATはじつと無頼改を見ながら立ち止まっていた。

すると突如、向こうから通信が入って来たのである。

ルルーシュ「通信だと！？あいつ、どういっつもりだ？」

リーマン「そのNMF、乗っているのはゼロ、いやルルーシュ・ヴィ・ブリタニアだな。」

ルルーシュ「何っ！！」

突然敵に自分の本名を聞かれ、ルルーシュは驚いた。

リーマン「伊達に戦乱のエリアー１を生き抜いてきた訳ではないよ  
うだな。コニンや他の隊員達はうまく撒けても、この俺はそう簡単  
には行かんぞ！」

ルルーシュ（まさか俺の生存に気付いていた者がいたのか…！？）

リーマン「私はレッドシヨルダー前線指揮官、リーマン將軍である  
！ルルーシュ・ヴィ・ブリタニア、貴様の王の力、<sup>ギアス</sup>どれほどのもの  
かこの私が確かめてやる！」

ルルーシュ「あいつ、ギアスの事も知っているのか！ええい、戦闘  
は避けられんか…！」

自分の生存やギアスの事まで知られている以上、ルルーシュ自身も  
無視するわけにはいかず、多少の無理は覚悟の上で敵の司令官と戦  
う事を決意する。

エリアー１の樹海で、指揮官同士の戦いが始まったのである。

## 「策略家vs傭兵部隊隊長」（後書き）

ルルーシュ対リーマンとの戦闘開始です。表現の仕方がおかしかったら遠慮せずに報告してください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0585v/>

---

スーパーロボット大戦 the ZEXIS

2011年10月10日11時52分発行